2022年度活動報告

幼児期の親子を対象とした性の多様性に対応したシナリオによる「いのちのおはなし会」の実践

杏林大学保健学部看護学科看護養護教育学専攻：佐々木裕子、長谷川和子(保健学部母子看護学)

1．活動の背景

幼い子どもたちへの性犯罪やいじめ、自殺など命を軽視した事件が社会問題化して久しい。周りの大人たちが命や性について正しい知識を持ち、子どもたちを育む性教育が重要である。これらを背景に私たちは大学を基盤とした地域貢献活動の一環として、幼児とその保護者を対象とした「いのちのおはなし会」（以下、おはなし会）に取り組んできた。今年度は、性の多様性に関する保護者のニーズに対応した新たなシナリオによるおはなし会を実践した。

2．活動の目的

① 子どもたちか命の大切さを知り、自分や周りの友達を大切にできる
② 子どもたちが自分の身体を知り、プライベートゾーンを守ることが出来る
③ 子どもたちがこころの性の多様性を理解し、自分とは違う友達を大切にできる
④ 周りの大人たちが子どもからの身体や性に関する質問に向き合い教育的関わりを考える機会となる

3．対象および方法

手続き：保育園に直接、または三鷹市園長会にておはなしへの参加を依頼した。
対　象：三鷹市と近郊の保育園の４歳～５歳児と保護者
方　法：おはなし会のプログラムに基づき、以下の2部構成とした。
【第1部】学生によるパネルシアターとエプロンシアター いのちの誕生、出産、男女の体のちがい、プライベートゾーン、多様な心の性（30分）
【第2部】赤ちゃん人形の抱っこ体験と教員主導での保護者・学生・保育園との振り返り (15分)

【おはなし会で用いた表現】
男性器：おちんちん
女性器：赤ちゃんの通り道
子宮：赤ちゃんのお部屋
卵子･精子：命のもと
性交：お父さんの命のもとをお母さんの命のもとに送り届ける
性器･胸･おしり：プライベートゾーン
性の多様性：一人ひとり違う心の色

4．今年度の活動実績

今年度の活動は、保育園6園で実施予定であったが、インフルエンザ流行の影響で1園で中止となり、5園で実施した。おはなし会に参加した子どもの総数は145名、保護者11名。

【子どもたちの反応】
命の始まりから赤ちゃん誕生までを実物大の胎児パネルと人形で説明するシーンではパネルをめくる度に歓声が上がり、母親の胎内で赤ちゃんが成長する様子と出産のシーンは印象残ったようであった。プライベートゾーンという用語は既に保育の中で使われていて、言葉の理解は出来ていた。胎児人人形の抱っこは大事そうに抱き、大きさと重さを実感できる体験になっていた。【保護者の反応】性の多様性を心の色＝違う色のハートの模型で表現し、好きなものや好きな人が違ってよいことを伝えたが、保護者には違和感なく受け入れられた。子どもからの身体や性に関する質問にどう答えたらよいか、対応に困っている保護者は以前と同様に複数見られた。

表1．活動の概要

保育園	実施日時	参加者(子ども)	参加者(保護者)
A	8月9日	30名	6名
B	3月6日	21名	0名
C	3月7日	48名	0名
D	3月9日	24名	5名
E	3月10日	22名	0名

5．まとめ

対面でのおはなし会は3年ぶりであり、子どもたちの反応や保護者の声を直接聞きながら一緒に作っていくおはなし会の楽しさを改めて実感できる実践となった。保育園や学生の声からもおはなし会のメッセージが子どもたちに十分に届く会であったことがわかった。コロナ禍での開催により保護者の参加者が少なく、次年度は親子で参加できるおはなし会を実践していきたい。